

《研究ノート》

## 小学校学習指導要領解説音楽編における 身体動作への言及

生 駒 忍

The References to Body Movement in Commentary to the Elementally School Courses of  
Study on Music

SHINOBU IKOMA

キーワード

音楽教育 (music education), 身体表現 (body expression), 新学習指導要領 (new courses of study),  
初等教育 (primary education)

音楽は、人間と無関係な空気の振動としてだけ存在するのではない。音波の振動が、脳ないしは認知過程のはたらきによって美を知覚させるところに、音楽が存在する。まさに、「音は心の中で音楽になる」(谷口, 2000) のである。また、音楽が人間を強く動かすような場合には特に、ころろだけではなく、身体のあり方が音楽に結びつく。岡田 (2003) や山田 (2008) では、音楽学のさまざまな視点や関心から、音楽と身体とのかかわりについて議論されている。また、いずれも最近和訳が刊行されているが、Small (1998) は「ミュージッキング」の概念を提唱して音楽が持つ身体的な側面の復権を図り、Miell, MacDonald, & Hargreaves (2005) では音楽のコミュニケーションにおける身体の関与も取り上げられた。

音楽教育においては、リトミックの開発以来、身体を音楽とつなげる活動へ高い関心が向けられてきた。わが国では、学習指導要領の中で常に取り上げられており、小島 (1983) も指摘するように、音楽の基盤としてのリズムの重視から、自由な身体活動、身体表現へと力点を移してきた。最新の改訂は、2008 (平成20) 年に行われており、大谷 (2012) はこの改訂に関連して、「言わば、「心の教育」の実践の場とし

て小学校の音楽科があるべき” “心の表現とは、すなわち、心が身体に乗り移って身体が表現することであって、子どもからいかに豊かな身体表現を導けるかが、音楽科教育において最も重要” (p.501) と主張している。そして、今回の学習指導要領改訂では、小学校音楽科において、表現のみならず鑑賞に対しても、体を動かす活動を重視する観点を取り入れられた。これは、小学校学習指導要領解説 音楽編 (文部科学省, 2008) にも反映されたとされている。時得・信谷 (2010) は、“現行学習指導要領と比較すると、体を動かす活動に関する記述が改訂後において、重視されてきていることが顕著” (p.27) と指摘している。また、生駒 (2012) は、音楽・身体・感情の関わりに対する心理学的な論考の中で、“昨年度から全面実施となった新学習指導要領の解説 (文部科学省, 2008) を見れば、鑑賞において体を動かすことへの言及がたびたびなされていることが分かる。” (p.13) と述べている。

ただし、これらは、解説のどこにどのような形で、体を動かす活動への言及があるのかについて、詳しくは取り上げていない。時得・信谷 (2010) は2箇所を挙げているのみで、生駒 (2012) には具体例は示されていない。そこで

本稿では、『小学校学習指導要領解説 音楽編』（文部科学省, 2008）において、身体動作に言及している箇所を抜き出し、整理することとする。これにより、身体動作が音楽教育の中でどのような形で求められているのかが明確になり、今後の研究や実践を容易にする材料となろう。

抽出に当たっては、身体動作に関して、自発的に生じるものと、教師側から直接的、間接的にうながされるものとの双方を対象とした。また、リズム打ちや呼吸法といった、身体性の強い活動ではあるが音楽音響の発生を目的とする側面の大きいものは、対象とはしなかった。

抽出されたものを、表1に掲載ページ順に示す。備考欄に「指導要領」とあるのは学習指導要領の本文からの引用箇所、「時得・信谷」とあるのは時得・信谷（2010）において引用されている箇所である。

“身体表現を軸にすえた学習は子どもたちの心を開放し、子どもたちの心を落ち着いたものにし、更なる学習意欲の向上につながる”“音楽学習によって、「生きる力」につながる豊かな心の醸成が期待でき、知識の活用は精神の成長と密接不可分であるから、「心の教育」の履践の場としての音楽教育の意義は大きい”（大谷, 2012, p.518）といった主張がある一方で、生駒（2012）は、身体表現から音楽の感性的な理解への効果を示すエビデンスの不足を指摘している。また、服部・豊島・福井（2013）は、科学的根拠のない右脳・左脳論を持ち出すなどとしての音楽科教育の擁護を批判し、音楽科の存在意義を「情操」におくことを否定すると共に、生理学的な検討を行っている。本稿で整理した、学習指導要領で重視される着眼点を、これらを受けた実証研究に取り入れることで、有意義な発展につながることを期待したい。

表1 小学校学習指導要領解説音楽編における身体表現への言及箇所

ページ	章節	記述内容	備考
24	3章 1節 1	低学年の児童は、生活の様々な場面で音楽に親しんでいる。例えば、友達の歌を聴いて一緒に歌い出したり、音楽に合わせて体を揺らしたり、身の回りの音に興味をもって何度も繰り返し鳴らそうとしたりする。また、遊びに没頭する中で、体の動きに合わせて即興的な旋律を口ずさむ行為もよく見られる。	
25	3章 1節 1	低学年の児童は、音楽に合わせて自ら体を動かすことを喜ぶ傾向が見られる。そこで、楽曲の気分に体全体で反応するなど、児童が夢中になって取り組むことができるような活動を工夫して、表現の能力を楽しく身に付けるようにすることが重要となる。	
25	3章 1節 1	また、この時期の児童は、生活の中でも、歌ったり、身の回りの物を鳴らしたり、踊ったりしながら、音楽表現を楽しんでいる。したがって、音楽表現の楽しさに気付くようにするためには、児童の自然な表現を受け止め、そのよさを伸ばしていくことが大切となる。	
25-26	3章 1節 1	低学年の児童には、音楽を聴くと自然に体を動かしたり旋律を口ずさんだりするなど、音楽を感覚的にとらえる傾向が見られる。そこで、音楽を形づくっている要素のかかわり合いに意識を向けた鑑賞活動を進める中で、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みなどに感覚的に反応し、音楽やその演奏の楽しさに気付くようにすることが重要となる。	
26	3章 1節 1	「様々な音楽に親しむ」とは、鑑賞の活動を通して、様々な音楽に出会うようにすることである。思わず動き出したくなる楽曲や、情景を思い浮かべやすい楽曲など、児童にとって魅力のある教材を選択することによって、音楽活動に親しみをもつようにすることが大切である。	

29	3章 1節 2	指導に当たっては、楽曲を聴いて感じ取ったことや想像したことを言葉や体で表したり友達と伝え合ったりしながら表現を豊かにしていく活動を通して、表現を工夫する楽しさを味わうようにすることが大切である。	
30	3章 1節 2	指導に当たっては、体の動きを伴った活動や互いに聴き合う活動など、様々な活動を行う必要がある。	時得・信谷
34-35	3章 1節 2	音遊びの例としては、リズムを模倣したり、言葉を唱えたり、そのリズムを打ったりする遊び、言葉の抑揚を短い旋律にして歌う遊び、身の回りの音や自分の体を使って出せる音などから気に入った音を見付ける遊び、体の動きに合わせて声や音を出す遊びなどが考えられる。	時得・信谷
38	3章 1節 2	指導に当たっては、音楽に合わせて歩くなど体の動きを取り入れたり、楽曲の気分が異なる音楽を聴き比べたりする活動などを通して、楽曲の気分を全体的に感じ取るようにすることが大切である。	
38	3章 1節 2	指導に当たっては、主な旋律を口ずさんだり、楽曲を特徴付けているリズムを手で打ったり、あるいは体を動かしながらフレーズ、速度、強弱などを感じ取ったりするなど、音楽を形づくっている要素に気付いて楽しく聴く活動を工夫することが大切である。	
39	3章 1節 2	ア 我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた、行進曲や踊りの音楽など身体反応の快さを感じ取りやすい音楽、日常生活に関連して情景を思い浮かべやすい楽曲	指導要領
40	3章 1節 2	アの事項は、児童がいろいろな種類の音楽に親しむようにし、児童の発達に応じて適切な教材を選択するための観点である。具体的には、我が国や諸外国の音楽を身近に感じることができるわらべうたや遊びうた、リズム、拍の流れ、フレーズなどを感じ取りやすく自然に体を動かしたくなる音楽、身の回りの物や事象に関連し、情景を思い浮かべやすい楽曲などを教材として選択することが大切である。	
40	3章 1節 2	また、視聴覚教材を活用して演奏している場面を見たり、音楽に合わせて演奏のまねをしたりするなど、演奏のよさや楽しさに気付くように配慮することが望まれる。	
44	3章 2節 1	中学年の児童は、音楽を聴いて感じたことを人に伝えながら、自分の感じ方や考え方を把握できるようになる。そこで、音楽を形づくっている要素のかかわり合いに意識を向けた鑑賞活動を進める中で、音楽から感じ取ったことを、言葉や体の動き、音楽などで表して、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みの働きを把握するようにすることが重要となる。	
44	3章 2節 1	指導に当たっては、自分の思いや意図が表現できるように繰り返し歌ったり、友達の表現を互いに聴き合ってそのよさを発見したり、音楽の流れを体全体で受け止めて生き生きと歌ったり、体の動きを伴った活動をしたりするなど、様々な活動を工夫する必要がある。	
48	3章 2節 2	指導に当たっては、楽曲に合わせて体を動かしたり、曲想の異なる楽曲や楽曲の中の対照的な部分を聴き比べたりする活動などを通して、曲想とその変化を感じ取るようにすることが大切である。	
58	3章 2節 2	また、主な旋律を支えたり飾ったりする副次的な旋律に関心をもち、旋律と旋律が重なって生まれる響きの広がりを感じ取る活動、速度、強弱、調など、音楽を特徴付けている要素の働きとその効果を感じ取ることなどが考えられる。その際、音楽に合わせて体を動かす活動、学習カード、板書などを工夫して、楽曲の構造に気付くようにすることも大切である。	
59	3章 2節 2	児童が音楽を聴いて心の中に描いた様々な情景や様子、気持ちなど想像したことや感じ取ったことを、言葉や体の動き、絵、音で表すなどして教師や友達などに伝えようとすることは、友達の感じ方に気付いたり、自分の感じ方を広げたりすることにもつながるものである。	

65	3章 3節 1	そこで、楽曲の構造に意識を向けた鑑賞活動を進める中で、楽曲の特徴や演奏のよさ、美しさについて感じ取ったことを、言葉や体の動き、音楽などで表して、いろいろな感じ方があることを理解するようにすることが重要となる。	
78	3章 3節 2	指導に当たっては、体を動かす活動を通して音楽の移りゆく変化を感じ取ったり、曲想が異なる楽曲、楽曲の中の対照的な部分を聴き比べたりするなど、曲想とその変化などの特徴を感じ取るようにすることが大切である。	
79	3章 3節 2	また、主な旋律と副次的な旋律との重なりや和声の響きの働きを感じ取る活動、速度、強弱、調など音楽を特徴付けている要素の働きとその効果を感じ取ることなどが考えられる。その際、音楽に合わせて体を動かす活動、学習カード、板書などを工夫して、楽曲の構造を理解するようにすることも大切である。	
86	4章 1	幼児期は体験活動が中心の時期であり、周りの人や物、自然などの環境に体ごとにかかわり全身で感じるなど、活動と場、体験と感情が密接に結び付いている。	
88	4章 2	(1) 各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては、音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽とかかわることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること。	指導要領
88	4章 2	この事項は、体を動かす活動を取り入れることについて示したものである。児童が音楽を全体にわたって感じ取っていくためには、体のあらゆる感覚を使って音楽をとらえていくことが必要となる。児童が体全体で音楽を感じ取ることを通して、音楽学習の基礎となる想像力がはぐくまれていくのである。このように、児童が音楽との一体感を味わうことができるようにするためには、音楽に合わせて歩いたり、動作をしたりするなどの体を動かす活動を取り入れることが大切である。	
88	4章 2	指導に当たっては、体を動かすこと自体をねらいとするのではなく、音楽を感じ取る趣旨を踏まえた体験活動であることに留意する必要がある。	

## 引用文献

- 服部安里・豊島久美子・福井一（2013）「音楽科の授業は子どもたちのストレスを下げる—行動内分泌学的研究—」『日本音楽知覚認知学会平成25年度春季研究発表会資料』、1-4.
- 生駒忍（2012）「音楽・感情・身体への心理学的未接近」『音楽心理学研究会論文集』、5, 12-17.
- 小島律子（1983）「音楽学習における身体活動の展開」『大阪教育大学紀要 第V部門』、32, 91-105.
- Miell, D., MacDonald, R. A. R., & Hargreaves, D. (Eds.) (2005) *Musical communication*. NY: Oxford University Press.
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 音楽編』 <[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfi](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfi)

- le/2009/06/16/1234931\_007.pdf>
- 大谷恵世（2012）「小学校音楽「豊かな表現の工夫」をめざした実践の分析—身体表現を軸とした事例から—」『四天王寺大学紀要』、54, 501-518.
- 岡田暁生（監修）（2003）『ピアノを弾く身体』春秋社
- Small, C. (1998). *Musicking: The meanings of performing and listening*. Conn: Wesleyan University Press.
- 谷口高士（編）（2000）『音は心の中で音楽になる 音楽心理学への招待』北大路書房
- 時得紀子・信谷準（2010）「身体表現活動を取り入れた拍感の体得をめざす試み—小学校低学年の音楽科授業を通して—」『教育実践研究』、20, 27-36.
- 山田陽一（編）（2008）『音楽する身体（わたし）へと広がる響き』昭和堂